

多文化・異文化理解の 促進と指導者養成

コロナ禍で大きな制約を受けている取り組みの一つに、国際教育交流があげられる。コロナ以前の社会においては、日本人学生の海外派遣や留学生の受け入れが積極的に進められ、また初等中等教育段階においても、英語をはじめとする外国語教育の拡充等、さまざまな取り組みが推進されてきた。これらの取り組みにおいては、第一に「ほんもの」に触れる機会が重視され、外部資源・人材の活用が積極的に行われてきたが、物理的な移動を伴う活動が制約される昨今においては特に、教室活動を担う教員の役割が重要であろう。

そこで、本シンポジウムでは「教員」に注目し、岡山大学の桑原敏典先生を講師として、ご自身が岡山県で関わってこられた教員の多文化・異文化理解涵養のためのプログラムについて、その内容と成果とお話いただく。北海道大学の国際共修授業にかんする事例紹介とあわせて、教員養成・研修および広く高等教育機関の教員を対象とした取り組みを概観することで、いかに教員の「国際性」および「多様性」理解の促進が重要か、またその認識の共有にはどのような手段・取り組みが有効かを、参加者のみなさんと考えてみたい。

2021年11月13日(土) 10:00~12:00 **オンライン開催**

参加申込先：<https://forms.gle/X4L3jzyaiaU4gC2u5> 申込用QRコード→



※定員は設けていませんが、参加方法提供のため、参加を希望される方は

11月10日(水)までにお申込み下さい。

※申し込みをされた方には、前日までに、参加方法をメールでご連絡します。

◆閉会のあいさつ・趣旨説明(10:00~10:10) 浮田真弓氏(岡山大学) 青木麻衣子氏

◆講演(10:10~11:10)「多文化共生社会の学校教育を担う教師に求められる資質とは何か—岡山大学の取組を事例として—」 桑原敏典氏(岡山大学)

グローバル化の進展に伴い、日本社会は益々多文化化している。そのような状況が見られるにも関わらず、学校教育においては、全ての子供に対して統一された環境の下で、同じルールを子供に課して、指導が行われているのではなかろうか。そこでは効率性が重視されるため、一人ひとりの子供の持つ社会的背景等への配慮は決して十分ではない。本講演では、多文化化が進む社会において学校はどのように変わっていくか、そのような学校において教師にはどのような資質が求められるかを論じ、岡山大学教育学部で行われている取り組みの一部を紹介する。

◆事例紹介(北海道大学)(11:10~11:25)

◆質疑応答・全体ディスカッション(11:25~11:55)

問い合わせ先：北海道大学高等教育推進機構 青木麻衣子 maoki[at]oia.hokudai.ac.jp

※メール送信の際はアドレスの[at]を@に置き換えてください。